

雪の里情報館 (山形県新庄市)

積雪と冷害に苦しむ農村に ひとすじの光明

旧農林省「積雪地方農村経済調査所」の 庁舎を保存・公開

雪の里情報館とは、国の機構改革によって閉庁となった庁舎を新庄市が譲り受けて、1万数千点におよぶ資料とともに保存・公開している施設である。

この積雪地方農村経済調査所が、雪害に苦しむ農村の救済・更生を担う機関として果たした業績を永く後世に伝えるとともに、雪国文化に関する市民の学習を促し、雪のふるさとづくりに資することを目的としている。

全国に類のない事業所 「積雪地方農村経済調査所」

昭和初期、積雪の苦に加えて繰り返す凶作のため疲弊しきっていた農村経済を更生させるために、調査・研究・指導を目的とした全国唯一の役所として積雪地方農村経済調査所（以下「雪調」）が、農林省の出先機関として設置された。

モデルとすべき前例がない任務

全国初の事業所ということは、とりもなおさず、先人が手をつけたことのない領域の研究課題に取り組む使命を負っていたということである。

雪調の業務は、①農村経済係、②副業及び農村工業係、③積雪研究係の三部署で構成されており、それぞれの業務の遂行にあたっては、農業経済学の東畑精一や低温物理学の中谷宇吉郎、建築学の今和次郎、哲学者で民芸研究家の柳宗悦など、各界の第一線で活躍している研究者を糾合して実践的な研究が進められた。



「雪調」設置までの道のり ～雪害救済運動の先駆者 松岡俊三の偉業～

山形県楯岡（現・村山市）出身の衆議院議員松岡俊三（1880～1955）先生は、雪国救済を語る上で欠かせない人物である。

松岡先生は、大正末から昭和初めの雪国農村の窮状を目のあたりにして雪害救済の必要性を強く感じ、政府に対してそのための施策を強く訴え続けた。それはやがて政府を動かす、雪国に暮らす人々の生活を向上させる道を拓くことになるのである。

訴えの主旨は、積雪と寒冷による各種の被害や不利益は、台風や洪水などと同じ自然災害であり、国として救済すべきであるというものである。この考えに対する理解を広めて、救済を求める民衆の運動に高めようと、厳冬期に身の危険をも覚悟して豪雪の各県各地に向けて「雪中行脚」に出たのである。各訪問地においては、雪の害に関する実態調査と、啓蒙つまり雪により被害や耕作上の不利に対する諦念から人々を解き放つことに力を注いだのである。

その後、自らの足を駆使した調査で明らかにしたことにもとづいて、政府に対して救済の必要を実証的に訴え続けた。

その不撓不屈の活動はついに国を動かす、東北全市町村に「特別市町村」として交付金を増額するなどの法令が昭和7年に成立し、救済が国の施策として初めて施行されることとなった。その一環で、積雪地方農村経済調査所は翌8年に、わけても、松岡先生の訴えに共鳴し熱く支持した新庄に設置されたのである。こうして、雪国の窮状を国として救済し更生させる道がようやく拓かれたのである。

その後の雪国振興施策の進展は、終戦を経て新潟県を拠点に設立された「(財)日本積雪連合」の請願で実現しつつ現在に続いているが、それというもの、戦前に松岡俊三先生が先駆者となって政府を動かす潮流を起こしたからであるといえる。



実習のための一大工場群 / 積雪地方農村経済調査所全景



◀「雪中行脚」に発つ時の出で立ちの松岡俊三

雪に関する研究の組織化、体系化

雪調は、雪に関する研究に組織的総合的に取り組む唯一の国の機関として、情報を全国から収集し発信する拠点となり、その名を広く世に知らしめた。

今日、雪氷研究における用語の「しまり雪」「ざらめ雪」などの雪の分類名は、雪調を拠点とした研究組織において定められたものである。これらをはじめとする各種の標準化によって研究の体系化が促進され、その後の雪氷研究が発展する契機となった（これらの分類名は、民俗語が学術用語として採用されている興味深い例である）。

救済、更生の使命を終えて

雪調は、戦後の産業経済の変化に伴う国の機構改革によって、事業所の名称も含めていくたびかの変遷をたどることになる。そして、最後の業務も上位部署に統合となり、昭和57年度を限りに役目を終えて半世紀の歴史に幕が降ろされた。

国指定の有形文化財登録

雪調の庁舎遺構は、国の登録有形文化財です。
(平成26年4月登録)

新庄市「雪の里情報館」

山形県新庄市石川町4-15
TEL 0233-22-7891
http://yukinosato.jp

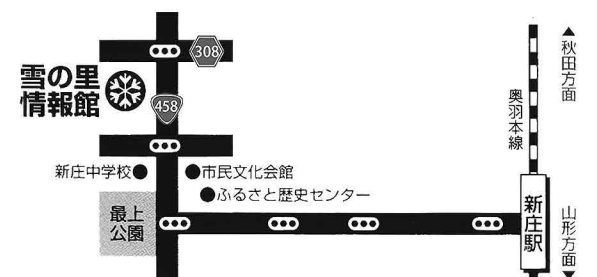
■開館時間：午前9時～午後5時

■休館日：毎週月曜日(年末年始12月29日～1月3日)

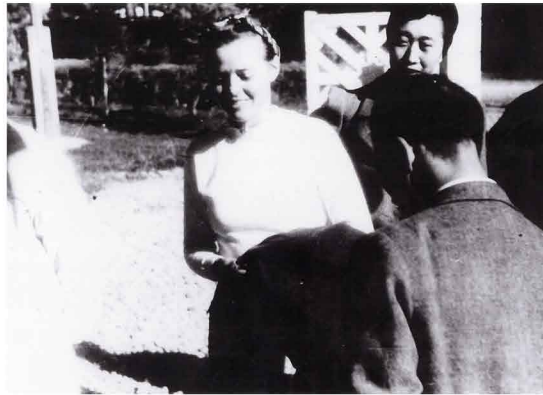
■入場料：無料

公式HP

雪調紹介映像



シャルロット・ペリアンが雪調に



ペリアンの来所(昭和15年)

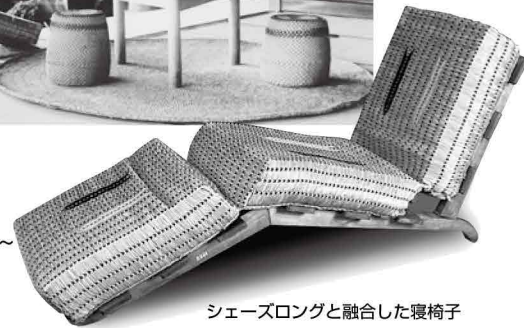
シャルロット・ペリアン(1903~1999)は、フランスの建築家・コルビジエの高弟で、いまなお実績が高く評価されている建築デザイナーである。わが国の外貨獲得のための輸出振興策の中で、家具等の輸出品のデザイン指導のために、当時の商務省の要請によって昭和15年に来日した。

この機会にペリアンの指導を仰ぎたいと熱望していた雪調の願いが叶って、東北各都市を巡回する行程で柳宗理らの同道で来所することとなった。

稲わら等を材料にした生活用具作りの副業化を推進していた雪調にとっては、具体的な助言を受ける絶好の機



ペリアンの助言を取り入れた寝椅子、スツール、テーブル
~本間美術館本館
清遠閣にて展示(当時)~



シェーズロングと融合した寝椅子

会であった。農民の手による各種の作品を目にしたペリアンは、その実用品が帯びる芸術性にいたく感動したといわれている。このときのペリアンの助言にもとづいて、寝椅子やテーブル、スツール等が製作されている(現在は山形県立博物館にて所蔵)。

特に、寝椅子は、腕利き職人(農民)の巧緻な手わざがペリアン自身のシェーズロングと融合した機能性とデザイン性を兼ねたものであり、ペリアンファンにとっては垂涎の逸品である。

新庄市では平成7年に訪問団を結成して渡仏し、晩年の女史との交流が実現している。90歳を超えたとは思えぬ生気に溢れる姿であったということであり、数十年前の来所当時のやりとりの鮮明な記憶をもとにした貴重なトークを記録に残すことができた。

その後、直筆の手紙が送られてきているが、少しのブレもない92歳の筆跡には驚くばかりである。



民具製作の講習会(昭和14年ごろ)



ペリアンからの手紙(部分)



実験農家

雪調における特徴的な実践的研究の一つに「実験農家」がある。

それは、雪下ろしと下ろした雪の片づけから解放されれば、その労力は現金収入のために鉄道の除雪などに充てることができ、一家の家計は成り立つのではないかとすることを検証するものである。そのために、建築家今和次郎に設計を依頼して高床で急勾配の屋根の家屋を建て、そこに標準的な一家(家族構成、耕作面積)に通年で生活してもらうことになった。果たして、家計の収支



一家が試験居住した実験農家

は黒字になり、仮説は検証されたというものである。なお、当時の農村住居に共通する採光や通気など衛生面の課題も考慮した設計であったことは当然である。この型は、現在普及している克雪型住宅の原型となっている。



実験農家の模型展示

実験農家の記憶 松田周治氏(ご健在)談

「就学前の幼年期をここで過ごしましたが、偉い研究者の先生たちが視察に来られる度に、両親から『おとなしく』を強いられて落ち着かず窮屈だったことを覚えています。あるときは、我慢しきれずにみんなをアツといわせることをやらかしたそうです。」

映画『雪国』の製作に協力

『雪国』は昭和14年、芸術映画社製作(石本統吉監督)で、わが国におけるドキュメンタリー映画の草分け作品といわれている。その3年がかりの撮影に雪調として協力している。

雪調旧庁舎(復元)

昭和12年に建てられた雪調庁舎を復元し、展示室として利用している。設計は今和次郎。雪下ろしの必要が無い急勾配の屋根は、当時、画期的なものであった。



雪調旧庁舎(復元)